令和５年１月

「戦争発生を未然防止のする方法を自然科学の研究からアプローチできるか？（Is it possible to approach the method of preventing the outbreak of war from the research of natural science?）」

明けましておめでとうございます。今年もどうぞよろしくお願いします。

２学期終業式で、生徒たちに前京都大学総長で霊長類学者の山極 壽一氏の著作「ゴリラからの警告　人間社会ここがおかしい（毎日新聞出版）」を紹介しました。

この本の中で、山極氏は戦争の始まりについて述べています。アメリカのオバマ元大統領が、2009 年にノーベル平和賞を受賞した際のスピーチで述べた「戦争はどのような形であれ、昔から人類とともにあった」という言葉を引用し、この言葉にあるような「戦争をすることを人間は本性としてもっている」という考え方が広く世界で信じられているけれども、これを根拠のないものとしています。

山極氏はまた、戦争を人間の本性とし、社会秩序は戦いの中でつくられてきたというという考え方は、レイモンド・ダートによって提唱されたとしています。

レイモンド・ダートという人は 1893 年オーストラリア生まれの人類学者で、1924 年に南アフリカで初めてアウストラロピテクスの化石を発見した人として知られています。山極氏によれば、原始の人類は肉食獣から狩猟される弱い存在であったが、40 万年前から 50 万年前に槍を用いて動物を狩猟するようになり、20 万年前に現生人類が出現して集団で大型の動物を狩猟できるようになった。そしてその武器を同じ人族に向けるようになったのは、せいぜい１万年前で、数百万年に及ぶヒト族の歴史のなかでもごく最近のことである。すなわち人類が人間同士で戦争を起こすのは、ヒトのもつ本性でも本能でもなく、別の何らかの理由である。

山極氏はそれを「人間のもつ高い共感能力が言葉によって目的意識をもち、集団への帰属意識を強めるために使われ始めたせいだ」と考えています。

インターネットを検索すると、戦争の最も古い遺跡は、１万３千４百年前のスーダンのヌビア砂漠にあるジャバル＝サハバ 117 遺跡であると述べた、多くのウェブサイトに行き当たります。

そうしたウェブサイトでは、武器による怪我で死亡した人たちが集団で遺跡から発掘され、戦争の存在が示唆されるとしています。何万人の人間が集団を形成して戦う後世の戦争の形態ではありませんが、小規模ではあるけれども１万３千４百年前の旧石器時代の人類は、すでに集団で争い合う戦争という形態を獲得していたと考えられそうです。

戦争の始まりについて述べた書籍として「戦争の起源（アーサー・フェリル著　ちくま学

芸文庫)」があります。また、「始まり」だけではなく、「戦争」を様々な角度から分析した書籍はきわめて多くあり、例えば戦争を論じた古典的な名著として「戦争論　カール・フォン・クラウゼヴィッツ著（岩波文庫)」などは後世にとても大きな影響を与えたと言われています。興味のある人は図書館で探してもらいたいと思います。

今回の私の話のテーマは、戦争の発生をどうやって未然に防ぐことができるかについてですが、原始の人類の戦争の話ではなく、現在実際に行われている戦争の性格について、私が目にした資料の中で、特に明確な論を展開していると感じたのは、「サピエンス」の著作で著名な 1974 年イスラエル生まれの歴史学者ユヴァル・ノア・ハラリ氏が、2018 年に出版した「21 Lessons 21 世紀の人類のための 21 の思考（河出文庫)」という著書です。

その著作の中でハラリ氏は、21 世紀における戦争では、戦争の勝利によって経済的な繁栄を獲得することが不可能であること、核兵器の脅威によって戦争そのものが人類の集団自殺に他ならないこと、サイバー攻撃の出現によって、戦争が遠いどこかの国のできごとではなくなり、テクノロジーの力で国や市民に大きなダメージを与えることが可能となったことを上げ、20 世紀までのように、戦争で大きな利益や成功を得ることが困難になったことを述べています。

逆にそれだからこそ、2014 年のロシアによる前回のウクライナ侵攻でのクリミア半島の強引な併合による成功が、新たな戦争の火種になることを 2018 年の段階で予言していました。

ハラリ氏の考え方に従えば、戦争の発生を未然に防ぐ最善の方法は、戦争を起こした当事国に戦争による利益や成功を体験させてはならないということです。しかし、現実にロシアによる戦争が起こってしまった現在において、その拡大をどうやって食い止めるか、その答えがこの著作の中にあるわけではありません。

戦争を研究する手法は、多くの場合、歴史学的手法、考古学的手法、社会学的手法によって行われています。私は先行論文や文献をきちんと調べているのではないのですが、自然科学的な手法で戦争の起源や本質、発生の未然防止を研究することは十分に行われてはいないのではないかと思います。

そんな中で、集団での闘争がどういうメカニズムで発生するかについて、社会心理学から高知工科大学が興味深い研究をしていることをインターネットで見ることができます。

人間とは自分の所属する「内集団」に対しての協力性を強く示すと同時に、自分が所属しない「外集団」に対しての攻撃性をもっていて、進化の過程の中で、遺伝子のレベルでその形質を受け継いでいくようになったという仮説を検証する研究です。

研究を担当する三船 恒裕准教授は仮説を検証するために、相手が攻撃してくる前に攻撃するという先制攻撃行動を測定する経済実験ゲームを開発して、人が「外集団」に対して攻

撃性をもっているかどうかを検証しました。結果として「外集団」への攻撃性はないというのが結論です。人間が戦争を起こす攻撃性を遺伝子レベルではもっていないことをデータとして示すことができた優れた研究であるように感じます。

このように実験を行ってデータを収集し、分析による仮説検証を行う自然科学的な手法で戦争のメカニズムを分析し、戦争の発生を未然防止する方法はないのか。そんなことを冬休み前からずっと考えています。

すでに世界のどこかで研究は行われていて、優れた論文が発表されているかもしれません。TED のようなプレゼンを行う場所で優れた研究が発表されているのを、私が知らないだけかもしれません。しかし、現実の戦争抑止は国家間のパワーバランスや、複数国家による集団安全保障のシステム、核攻撃の報復への恐怖しか戦争の抑止力が存在しないのではないか。そうした無力感から人類は脱する必要があると私は考えます。

山極氏は、戦争が人間の原罪であり、暴力は最初から人間とともにあったとする考えは、「2001 年宇宙の旅」などの映画のテーマとなって人々の心に深く根を下ろすようになったとも述べています。

「2001 年宇宙の旅」はアーサー・C・クラークのＳＦ小説から着想を得たスタンリー・キューブリック監督が、1968 年に制作した映画です。主題となる音楽にリヒャルド・シュトラウスの交響詩「ツァラトゥストラはかく語りき」を用いたこともあり、単なる SF 映画の域を超え、ニーチェの永劫回帰の思想と重なる哲学的な世界が表現されています。また、1968 年制作と思えない 21 世紀の現在と変わらない様々なテーマが内包される作品でもあります。その冒頭、原始の人類が謎の石板のような真っ黒な直方体を発見することによって武器を使うことを覚え、集団での争いに勝って知性と文明に目覚め、進化させていくことの暗示を示す場面があって、その強烈な印象が戦争することが原始から人間の本性や本能であったと人々をミスリードした可能性があるのかもしれません。

2023 年は、2022 年にロシアのウクライナ侵攻によって引き起こされた社会不安、エネルギー不足、食糧不足、核戦争の脅威を未解決のまま始まりました。人類は戦争による文明の後退があってはなりません。

私たちが、今しなければならないことは、山積する気候変動や環境劣化、生物多様性を少しでも改善し、持続性社会の実現を目指していくことです。いまだに根強く存在する差別や格差がなくし、世界中の多くの人々が幸せに暮らすことができる世の中をつくっていくことです。

2023 年が希望の年となることを祈念し、小石川の生徒たちの活躍を心から期待して、2023 年最初の校長メッセージといたします。